

になるものであり、個人や、本分家などがまつる神以外の、近隣の組織として神をまつる最小単位が、裾野市域ではモヨリであると言えよう。

### モヨリと祭祀

モヨリごとに神社をまつる例は前述のようにいくつも見られる。その多くは、モヨリでの生活の安全を願うものである。実際、葛山の田場沢で正月と、一〇月一七日に行っている山の神祭りでは、「区内安全」の灯籠が置かれている。当日は、田場沢中の世帯主や子供たちが山の神の神社に集まり、当番の用意した御供(赤飯)をあげて祭りを行う。正月のドンドヤキもモヨリを単位に行われることが多い。モヨリごとに道祖神の石塔が建てられ、そこに小屋を作って子供たちはドンドヤキの準備をしたものだった。モヨリが大きいと、その中を組に分けて行っている。

葛山のように、安全祈願のための不動講を行うモヨリも多い。上城では、今は年二、三回(昔は毎月二七日)に不動講を行う。一二月二七日の不動講では代参の打ち合わせをして、モヨリの代参人を決める。代参人は二月の節分に、神奈川県秦野市の大山神社へ参拝して、モヨリの安全を祈願し、モヨリ中のお札を受けてくる。田場沢でも節分の日、翌年の代参人をくじで決める。

ムラの安全といえば、昔はともかく火事を防ぐことが大切だった。ひとたび火事が出ると、あっという間にムラの財産を失い、ムラの大切な人手を失う。一軒だけの災いではすまなかった。下条では一二月から二月頃まで、毎晩順番に拍子木を叩いて夜回りをしたものだ。夜回りがなくなった今も、モヨリごとに清水市の秋葉神社へお札を受けに出かけている。中里では区長と組長が、田場沢ではくじで選ばれた代参人が、それぞれ秋葉神社からお札を受けてきて全戸に配る。家々がそれぞれに祈願するのではなく、モヨリが全体で火事を防ぐ努力をするのである。



写真2-50 夏祭り (富沢)

念仏も、ムラの安全を願ってモヨリごとに行われる。田場沢では、昔は若い人が各家を回ってマワシネンブツ(回し念仏)をしていた。現在は、年寄りが行うようになって以前ほどには盛んではなくなったというが、この例のように、年寄りの専売特許のように思われている念仏も、かつてはムラの安全を祈願するために老いも若きもムラ中で盛んに行ったものであった。

#### 村の祭祀

深良のように、江戸時代には統一した氏神を持たない村もあったが、多くはモヨリがそれぞれの神社を持っているほかに、村としての氏神をまつている場合が多い。

葛山では、浅間神社を氏神として、各モヨリが当番を務めて村全体でまつている。当番は、上城↓中村↓下条↓中里↓田場沢の順にまわり、当番に当たったモヨリが一年間の神社の世話と祭典の準備をする。当番区の引き継ぎは一〇月の秋の祭典のあとに行われ、祭りの決算書、目録、神社の鍵、のぼりなど神社関係のものが、ヒキツギモチ(引き継ぎ餅)とともに次の当番区に引き渡される。一九八七(昭和六二)年までは、葛山全体の大区長が置かれていたが、これは葛山の鎮守である浅間神社の当番区の区長が務めていた。祭祀の制度が、行政の制度としても機能していたのである。

富沢の鎮守は愛鷹神社で、一二班の住民までは氏子として当番を務めるが、一三、一四班は入っていない。このよ

うに、行政の地域区分と伝統的なムラの範囲とがずれてきて、新住民が増えてくると、ムラに住みながら、ムラビトとはみなされない家が存在するようになった。富沢の一三、一四班の住民がそれに当たる。多くの場合、そのムラに定住しない、アパートやマンションなど、賃貸住宅の家であり、富沢の場合もそうした家ばかりの一三、一四班が、神社の祭祀に関係していない。祭祀当番は、カミ(上モヨリと中モヨリ)、シモ(下モヨリ)が、毎年交代で務めている。当番のモヨリは九月の終わり頃に全員が集まり、くじ引きで祭祀のための役割を決めていく。役割には、注連繩しめなわを張る係、御神燈をつける係、買い物係、おかずを作る係、当日番、あとかたづけ番などがある。

このほか、富沢全体で不動もまつている。祭日は三月二八日で、こちらもカミ、シモ二年ずつ交代で当番を務める。不動堂では、三月の祭祀のほか、テルニューバイ(照入梅・日照り)のときに雨乞いをした。一九三〇年代から五〇年代までは堂のまわりに露店が出たこともあり、富沢全体で雨乞いの祈願をした。不動の湧き水をくんできて、ご神体のヒノカミサンにかけ、あとは飲み食いの祭りになった。

生産に関する祈願は、いまでもしばしば近世の村の単位が生きている。特に、富沢の例に見られるように、共同祈願としての雨乞いは、近世の村を単位に行われてきた。

葛山のカミナリサンには二段階あって、下のフジバタで効果がなかったときはさらに上のタケノカミナリサンで再び雨乞いをする。山の上では「雨降らせたまえ」という組と、「カミナリサンへのリュウガンだ」という組が交互にこれを唱え続ける。雨乞いを行うと三日のうちには雨が降ると言われたものだった。葛山の雷神宮の祭典は七月二〇日に行われ、当番区から代表が五、六人出て、桜塚の一の鳥居から社までのミチガリ(道刈り)や境内の掃除をしてお神酒をあげる。一九六〇年前後まではこの日に、青年団が相撲をとったものだった。今は、下条では辻にのぼりをた



写真 2-51 村々を回るヨシダサン (公文名・鹿島神社)

てて、ソフトボール大会をしている。

**ムラを超えた祭祀** 近世の村を超えた、さらに大きい範囲での祭祀や、共同祈願も行われてきた。富岡地区では、ムラを超えた事柄を話し合うために区長会を開いているが、一二月月上旬に開かれる区長会には

氏子総代も集まって、タイマ(大麻)の式が行われる。大麻というのは伊勢神宮のお札のことで、それを分けるが、そのときにそれぞれの氏神、歳神、火の神のお札も配っている。

裾野市域で、ムラを超えてまつられる神でもっとも有名なのはヨシダサンと呼ばれる吉田神社をめぐる祭祀であろう。黄瀬川の東にある岩波石脇、佐野、茶畑、麦塚、二ツ屋、平松、公文名、久根を中心として御殿場市の神山こうみやまから三島市の伊豆佐野までの村々がかかわっている。これらの村は順番に祭祀当番を担当し、当番になるとヨシダサンの神輿を担いで村中を回る。ヨシダサンは社を持たず、ご神体の安置された神輿を

回すことで祭りが行われる。すなわち、常に鎮座している村はなく、かかわる村に平等に回るといふ神なのである。ムラの若い衆に担がれた神輿は、ムラ中を回って疫病を払ってくれる。当番村の受け渡しは、四月四日の祭祀のホンビ(本日・当日)の数日前、三月二八日に行われる。決められた受け渡し場所で、前の年の当番区から神輿が受け渡され、その年の当番の区の男衆によってその村の鎮守へと担がれていく。沿道の各戸は「奉納 吉田神社」と書いたの

ほりを掲げ、歓迎する。神輿が神社に着くと「鎮座式」が行われ、前の当番から、その年の当番へ神輿や道具類の引き継ぎ式が行われる。こうして、ヨシダサンはムラを超えてまつられてきた。

### ムラの火葬場

土葬が一般的だった頃、ムラでは特別な場合にのみ火葬が行われた。火葬は多くの場合、伝染病ややはり病にかかった人が死んだときに行われ、その場所も、ムラによってムラのはずれの一角と決められていた。

富沢のヤキバ(火葬場)は、観音坂の方と、ツクリバの道の西の方にあった。戦前までは土葬が普通で、伝染病でなくなった人などがこのヤキバで火葬された。一般の人も火葬にしようとしたことがあったが、素人ではうまく焼けないということ、特殊な場合を除いては、土葬に戻ってしまったという。戦後、火葬が一般的になる始めの頃は、二本松のヤキバを借りて自分たちで焼き、その後は三島市や長泉町のヤキバを借りた。

深良では、明治時代コレラがはやって一〇日間のうちに一人が死んだことがあったが、そのときには火葬場がまだなかったという。その後、モヨリごとの焼き場ができてノヤキ(野焼き)をするようになった。切久保と遠道原の火葬場は工業団地地先にあったという。また、震橋では大正まで山の共有地で火葬していた。須釜では、一九五二、三(昭和二七、八)年頃に火葬が一般的になったが、当時は薪を持ち寄り、重油をかけて燃やしていたという。原では、一八七〇(明治三)年頃に共同墓地ができた頃から火葬が行われるようになったという。深良としての火葬場ができてからは、村役場でオンボウを頼んだり、共有のリヤカー一式と霊柩車を持つようになった。深良で火葬が増えたのは一九五五(昭和三〇)年以降のことという。

## 墓地の共有

裾野のムラを歩いていると、畑の中に石が建っているのをよく見かけることがある。家の敷地の隅にも、同じように見られるこの石は多くの場合、昔の墓だとされている。深良の原では、明治の始めに火葬が行われるようになるまでは、屋敷の墓に土葬していたという。

このように、裾野市域では墓地はかつて屋敷地の中にあり、しだいに屋敷の外、ムラうちの共同墓地あるいは、檀那寺の墓地へと移っていく傾向が見られる。多くは、明治の頃にモヨリ単位で共同墓地を作り、順次、屋敷からこれを移していった。移すといっても、もとの屋敷墓をまつらなくなるのではなく、新たに埋葬する場所を変えたということであり、屋敷の墓も先祖の墓として守り続けている。

新しい墓地をシンバカと呼ぶことが多く、深良の須釜では一八八九(明治二二)年にシンバカを作るまでは、屋敷うちに墓があったという。また、原では、明治の頃にすでに家のあった旧戸はこのシンバカを使うが、新しくできた新戸は、寺の墓地を使用している。このように、明治に一齐に作られた共同墓地は家数が増えるに従って手狭になり、さらに新しい墓地が必要となってきた。原のように、寺がその受け皿となる場合もあるが、新たな共同墓地を作ることもあった。上原では、最初に作った共同墓地をキュウボチ(旧墓地)、戦後新たに山神社の隣に作ったのをシンボチ(新墓地)と呼んでいる。

茶畑でも、モヨリごとに共同の墓地を持っている。本茶モヨリにある共有の墓地には七軒の家の墓が建っているが、このうちもっとも新しい墓石は一八六八(明治元)年のものだという。この墓地をキュウハカ(旧墓)と呼ぶのに対して、現在使っている共同墓地はシンハカ(新墓)と呼んでいる。キュウハカもシンハカも彼岸や盆、正月には墓参りをする。本茶モヨリの共同墓地は、中丸、天理町と同じ敷地に作られている。しかし、三つのモヨリごとに区画は分かれてい

て、混在していない。墓地にも「モヨリごと」の意識が現れていると言えよう。もっとも、道上と峰下についてはモヨリの区画をつくらずにひとつの共同墓地となっている。葛山では、古い時代は屋敷に墓が作られたが、明治時代に全戸の墓を仙年寺に作ったため、モヨリごとの共同墓地はない。

ムラごとの共有の形態は異なるが、屋敷の墓から共同の墓への変化は明治期に起こっていたようであり、さらに戦後になって新たな共同墓地を作ったところも多い。イエの墓からムラの墓への変化は、ムラでの生活にどんな変化をもたらしたのだろうか。

## 第六節 世間の広がり

## (一) 交通手段の変化と世間の広がり

## 世間の広がり

ムラにすむ人々にとって「世間」とは、ムラの外のことを意味する。「世間の風は冷たい」という言葉があるが、冷たい風に吹かれるのはこのあたりでいえば、モヨリの外であり、さらに江戸時代の村、今でいう地区の外に出たときであろう。かつてのムラの生活では、減多なことがなければ世間の風にさらされることはなかったが、それも交通の発達とともに、人々の世間は広がり、さまざまな風に当たることになっていった。特に上層の家ほど世間は広いのが普通で、行動範囲も階層による差が大きかった。

## 御殿場線と裾野の人々

一八八九(明治二二年)に新橋と神戸の間を結んだ東海道本線は、一九三四(昭和九)年に丹那トンネルの開通により、国府津と沼津の間が御殿場線となった。開通当初「佐野駅」とっていたのを、一九

一五(大正四)年に「裾野駅」と改め、さらに一九四四(昭和一九)年に新たに裾野と御殿場の間に「岩波駅」ができた。汽車が通るまでは、さして遠いところに行く必要も生まれなかったから、深良では駅の建設に反対運動まで起こったという。開業当時「ステンショ」などというハイカラな呼び名で呼ばれたりした駅も、その便利さを知るまでには時間がかかったのであった。若い衆は汽車が通るようになってもしばらくは、三島の明神の祭りに下駄っばきでいったものだった。むしろ、三島まで歩いて行くには時間がかかる子供たちの方が、大人より早くから汽車に乗り始めていた。一九一四(大正三)年生まれの深良に住むAさんは、子供の頃に、ドンドンヤキのための買い物のため、正月に



写真2-52 裾野駅前（平松）

子供同士で裾野から下土狩まで汽車に乗っていったという。一九二五（大正一四）年生まれの同じく深良のBさんも、子供同士で沼津の千本浜せんぼんはまに海水浴に行くときは、裾野から御殿場線に乗って行ったという。

もともと、一般のムラの人たちより「世間」が広がった上層の家の人々は、さらに早くから汽車を利用していった。

一九二二（明治四五）年生まれのCさんは、一九三三（昭和八）年に見合いをしたが、その会場は、御殿場線の中だったという。双方の両親と本人とが沼津駅で汽車に乗り込み、裾野駅に着くまでが見合いだだった。そんなことができたくらいだから、汽車の中は相当すいていたことであろう。また、それまでにもCさんは汽車には乗り慣れていたという。Cさんは沼津の女学校を出てから、東京の家政学校へ通っていたし、その夫も一九一九（大正八）年から一九三一（昭和六）年まで東京の学校へ通っていた。こうした上層の人々にとって、汽車は当時すでに日常生活の足となっていたのである。ちなみにこの二人の結婚式も、東京の東京會館と地元と二カ所で行われた。東京は汽車に乗り慣れている人々にとっては、大正時代にすでにごく近い存在だった。

昭和に入って、汽車の利用は増えていった。戦争中は、御殿場線に乗って軍需工場へ、また戦後は農閑期に製糸工場などの勤めに沼津などに出るようになった。甘藷出荷組合は裾野駅から裾野特産のサツマイモを大量に大阪市場へ出荷するようになった。特に正月は京都や大阪では芋粥を作る

のでたくさん出荷したという。また、一九五五(昭和三〇)年頃からは農家の兼業化が進み、世帯主も御殿場線に乗って勤めに出るようになった。御殿場線は、ムラの人々の世間を徐々に広げていったのである。

**馬車から** かつて野菜などを運搬するときは、馬力やリヤカー、荷車、自転車を利用した。特に馬力は自動車が登場

**自動車へ** 場するまでは大切な輸送手段だった。葛山には、「馬力引き」を商売とした人も何人かいた。Dさん(一

九一八年生)は、一九四七、八(昭和二二、三)年頃まで、山師が伐採した木材を馬力で沼津や三島まで運んでいたが、自動車を扱う運送屋が登場してやめてしまったという。Dさんが独立して馬力屋になる前に、職人として働いていた今関馬力屋では、乗合馬車もやっていた。一〇人ほど乗れる馬車が、須山街道を笛を吹きながら走っていた。馬車は一九三〇、一(昭和五、六)年頃までで、一九三二(昭和七)年には自動車に変わったという。

今のようなバスになったのは戦後のことだったが、それでも葛山の道は砂利道でバスが入れなかったので、一九五〇年代までは御宿まで歩いて出てバスに乗らなければならなかった。その後、バスは三島本町から上城入り口まできて、田場沢行きと上城行きとに分かれていたが、個人が自動車を持つようになった今は、ふたたび田場沢行きのバスは廃止された。

深良では、新田の人が大正末頃に東駿自動車という会社を作り、バスを走らせた。神山・深良新田に車庫を置いて一〇年ほど営業したが収支がひきあわず、やめてしまったという。この自動車会社の権利はその後、富士山麓電軌鉄道株式会社に移って、バスの大型化、新路線の開通が進められたという。(裾野市教育委員会編『裾野』一九七八年改訂版)

自動車が走るようになったといっても、一般の人が乗るようになるには時間がかかった。普通の人にとって自動車



写真2-53 スソノのマチ並み (平松)

は、やはり長い間特別な乗り物であった。一九二八(昭和三)年に三島から深良の原に嫁に来たというEさん(一九〇七年生)は、裾野駅まで人力車で来て、駅からハイヤーに乗って婚家についた。一九四三(昭和一八)年に堰原せきばらから深良の上原に嫁いだFさん(一九二二年生)は、自分自身は木炭自動車に乗って行き、嫁入り道具は牛車でひっぱっていたという。花嫁道中は特別な移動であったから、いつもは使わない自動車が用いられたのである。

## (二) 買い物と行商

### 買い物

スソノといえは、かつては佐野のことをさしたもので、葛山などからスソノへ出かけるときには下駄を履いて、着物を着てハレのしたくで出かけたものだった。地域のムラにあって、佐野はマチとして人の集まる場所だった。若い人たちは佐野へ映画を観に行った。ちゃんとしたものは佐野まで出て行って買い物をしたもので、たとえば結婚式の引き物などは佐野の商店に注文した。

買うものによって、買う場所には段階がついていた。葛山では、ムラうちに魚屋や小間物屋などはあったが、ちょっとした買い物には御宿に出た。御宿に行けばたいの日用品は間にあった。大正始めからは富岡村の村医も御宿にいた。しかし、もう少し改まったような買い物はスソノ、つまり佐野まで出ていった。佐野には呉服屋や、下駄屋、足袋屋もあった。



写真 2-54 現代の行商 (1990年・深良)

盆暮れの買い物などは主に佐野に行っていたが、さらに沼津まで出ることもあった。裾野市域の人々にとって、もっとも大きいマチは沼津であった。ムラの商店などでは、沼津へ仕入れに行っていた。三島へも映画を観に行ったり、子供たちが正月の縁起物を明神に買いに行ったりしていたが、三島はむしろ娯楽や祭りのときに出かけるマチだった。

上層の家ではさらに遠くに出かけていた。盆暮れは沼津へ、衣料品など特別のものはさらに東京まで出かけて買っていた。昭和の初め、ムラの上層の人々のハイカラは日本橋の三越だった。

### 行商

富沢や葛山へは沼津の我入道がにゅうどうなどから魚屋が行商によく来ていた。茶畑でも、沼津の静浦や馬込から自転車やオートバイにリヤカーをつけて売りに来ていた。刺身、シラス、ホッケ、アジ、イワシ、サンマ、イルカなどを持ってきた。昔はバケツ一杯のイカが五銭で買ったものだったという話も聞く。

刺身はモノビのときだけ買った。エビやシラスは蒲原からも売りに来ていた。我入道から箱を背負って葛山に来ていた女性は、岩波から行商してくるので、葛山に来るのは九時頃だったという。行商に来る人たちは、たいてい決まった時間に、決まった場所へ来るので、長年のつきあいでも顔なじみになっていて、サツマイモやサトイモ、鍋焼きなどを出してあげることもあった。行商の人もいつものことなので、家の人がいなくても戸棚に魚を入れていってくれたりした。

茶畑には三島から三日おきくらいに醤油、酢、蜂蜜などを売りに来ていた。このほか、富山の置き葉が回ってきたり、ムラうちでも市ノ瀬から呉服の行商が来たりしていた。マチ場には、産地の方からサツマを売りに来たりもした。こうして、ムラの中にはいつもさまざまな行商人が入っていた。

行商ばかりでなく、戦中、戦後には食料を交換するために、熱海、伊東あたりから農家へやって来る人も多かった。海からは魚を持ってきて、農家でサツマイモやジャガイモなどと交換した。「世間」は出て行かなくても、こうしてムラの中に入ってくることも多かった。

### (三) 信仰の広がり与交流

**富士信仰と** 神参りのためにムラを出たり、ムラに来る人があったりと、信仰を媒介にした往来は江戸時代から盛んに行われていた。特に、富士山の登山道の通る裾野には、富士信仰に関連してたくさんの人々が往

来してきた。旧甲州街道は根方街道ねがたと呼ばれ、長泉、富沢、桃園、大畑、葛山、金沢、今里、須山、須山口と結んで、宮川（佐野川）で袂たもとぎをした行者たちが須山南の登山口にある浅間神社へ参っていた。かつて、富士山への登山者は、須山の浅間神社に参拝してから大野原道へと出ていった。今は道路事情が変化してこの道は使われなくなったが、開山式、閉山式は須山の浅間神社で、裾野市や観光協会の役員などが参列して行われている。『須山の民俗』

つい最近まで、下山した行者たちは裾野のムラムラを順に回り、葛山の浅間神社などで護摩を焚いていた。下条の明王寺は古くは富士山から下ってきた法師の立ち寄る足場でもあったという。またときとして、そうした行者がムラに定着することもあった。葛山の鎮守の浅間神社の日榮という神主は、沼津出身の行者だったが、須山から千福一帯



3



4



1



2

写真 2-55

富士登山道の道標

1 須山入口にある道標

2 常夜塔に刻まれた道標(御宿)

3 馬頭観音の道標(御宿)

4 辻に建つ道標(佐野)



写真 2-56 須山浅間神社叢

を回り歩いて、景ヶ島の依京寺に住んだりしていたが、ムラの人たちに請われて浅間神社の神主になったといわれる。富沢では、春から夏にかけて年一回、葛山からウラカイドウ(根方街道)を通ってくるホウエンサン(法印・行者)の姿を見かけることがあった。千本浜に浜降りするために通ったもので、法螺貝を吹きながら三人ほどが馬方とともにムラにやって来た。ムラの人たちは、その姿を見ると、お金やお茶を持って行って子供のお祓いをしてもらったものだった。

#### 神参りと 物見遊山

法印にお祓いしてもらうと、子供が病気にならないと考えられていたように、神や仏は外から来たものや、ムラの外にあるものの方が御利益があるとされることも多い。富沢の個人の家でまつている八幡には、戦争中ムラの外からたくさんの方が戦勝祈願に訪れたという。同じく富沢の不動はムラでまつているが、願

かけに来るのは近くの人より遠くから来た人の姿ばかりが目につくという。寄付壇には、岩波や神山、伊豆島田、三島といった地名が見られる。

ムラから出ていく神参りも盛んに行われた。もっとも盛んだったのが伊勢参りで、伊勢神宮に参ることとともに、その道中の物見遊山が、ムラを出る機会の少なかった時代には貴重な体験だった。戦前は兵隊検査のあとに個人で行くことが多かったが、中学校で連れて行くこともあったという。



写真2-57 街道の信仰

- 1 街道に建てられた順礼供養塔群(深良上丹)
- 2 大山講でのお札配り(葛山田場沢)
- 3 街道の石仏前での念仏講(佐野)

葛山の田場沢には、明治時代に書かれたと思われる伊勢参宮日記が残されている。それによれば、一月四日に「佐野仕立屋で」脚絆わらじを買い、草鞋わらじを買って旅立った。まず、佐野に出て、汽車で江尻まで行き、そこから静岡までは馬車で出て、一日目は静岡泊り。翌日は静岡から掛川まで出てから、船で天竜川を渡って豊橋へ、そこから汽車に乗って熱田へと向かっている。伊勢参りに出たムラの人々は、普段めったに乗ることのない汽車、馬車、船を乗り継いで、見慣れぬ風物や風情に触れ、これをふたたびムラに持ち帰る。こうして、世間を広めていたのである。

伊勢参りばかりでなく、ムラの人たちはさまざまなところへ神参りに出かけた。茶畑の滝頭公民館下にあるラッカ（羅漢）塚は、四国など方々を歩いてきた人が一つずつ建てたものだという。ムラの境には庚申塔などともに西国順礼供養塔が並んでいるのをよく見かける。順礼を終えて無事帰ってきた人々によって建てられたもので、これらの塔は江戸時代の始めから人々が信仰のためにムラの外へと出ていっていたことがわかる。ムラの代表者としてお札を受けに行く代参講は、今も神奈川の大山や秋葉神社などに出かけている。

身近なところでは、三島の明神に安産祈願や七五三に出かけていく。裾野では葬式のときの忌中位牌を沼津千本の浜に持って行って流すハマオリ（浜降り）という民俗があるが、そのあとは浜の近くの料理屋で精進落としを行うことが多い。今のように生活に余裕がなく、旅行ということもほとんどしなかった時代には、神仏を口実にした物見遊山はムラの人々の楽しみの一つでもあったのである。

ムラに入ってくる

裾野には屋敷の中に神をまつている家が少なくない。そうした神仏の中には、ムラの外からやってくる神仏・宗教者 ってきた民間宗教者によってもたらされたものがある。本茶モヨリのある家では、親の病気を治すために麦塚の宗教者にみてもらって、四〇年ぐらい前から八幡をまつり始めたという。

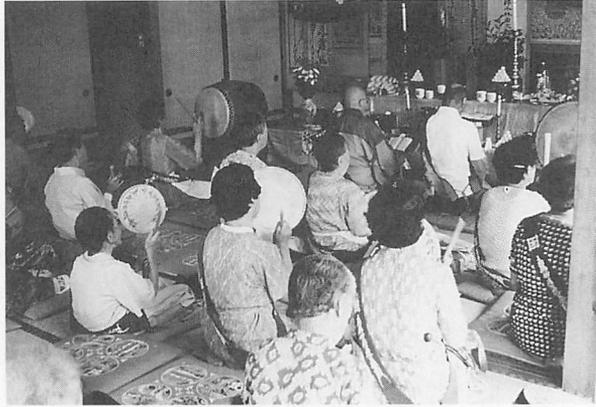


写真2-58 中駿大題目講 (深良上須)

前述したヨシダサン(吉田神社)もムラにやってくる神である。神輿に乗ったヨシダサンは、毎年順番に村々を回っていく。疫病を払ってくれるヨシダサンはどここのムラでも歓迎された。送り迎えのときには「(神輿を)渡せ、渡さないと賑やかだった」という。また、神輿を泊める家をヤド(宿)といい、「神輿を泊めることは縁起がいい」とされて、どこの家でも泊めたがったという。

オオネンブツと  
オオダイモク  
中駿大念仏は、公文名東組の室伏喜代太郎という人が  
初代の会長になって、今から九〇年くらい前に始まっ

た。昔は、伊豆佐野↓麦塚↓本茶↓平松↓公文名↓久根↓深良↓神山↓伊豆佐野という順番で回っていたが、いまは、深良↓久根↓公文名の順で一カ月に一度回っている。それぞれの地区の中はモヨリごとに戻している。

講師は一二〇人いるが、集まるのは六〇人ほどで、唯念の念仏講だが、弘法大師、十三仏、観音などもまつている。また、一月には慰安会として沼津までオフロ(ヘルスセンター)に行っている。

このほか、今は千福が抜けて、下和田・葛山・御宿をひと回りする富岡大念仏も行われている。

深良の上原に住む小林由太郎が一八七五(明治八)年に始めたといわれる中駿大題目は、裾野の東側の地区が合同で題目講を行うもので、初講は一月二〇日、そのあとは当番が日程を決める。当番はモヨリごとに務めていて、年に一

回オフロ(温泉)に行ったり、八〇歳になった人に講から座布団を贈ったりと、ムラを超えて親睦を深めている。

上原には、日蓮上人が宿泊したと伝えられる車返しの堂があり、上原のモヨリが全体で管理している。虫干しの日には、県の宗務所長、日蓮宗総長や二五人ほどの僧侶がきて題目を唱え、各地から日蓮宗の信者がムラを訪れてお参りする。

信仰により、ムラを出て世間に触れることもあるが、一方で、ムラの中に特殊な信仰のための施設があるためムラの外から人々が集まってきて、世間の風が吹き込むことも多かったのである。

#### (四) ムラの休日と娯楽

##### 祭り

ムラの祭りには、ムラうちだけでなく、周辺のムラからも遊びに来たり、興行師などが仕事にきたりと、外からムラへ人が寄ってきたものだった。出雲からはヤスキブシ(安来節)が来たし、五竜観音前の鰻屋からは小辰丸という人が浪花節をやりに来た。深良の原では八月二四日の地藏祭りに草相撲が行われ、沼津や静浦、御殿場、小山など近辺のムラから力自慢の若者が集まった。原の青年たちは、自転車で沼津や御殿場へ、競い合うように賞品集めに行ったもので、商店から反物や雑貨をもらってきては相撲の賞品にした。ムラの祭りは、ムラだけの楽しみではなかった。

青年たちは、夏から秋にかけてあちこちのムラの祭りに出かけてはヨアソビして歩いた。沼津の川開き、石脇の天王、御宿の八幡、深良の赤子などが大きな祭りだった。よそのムラの祭りでは、芝居や映画を観たり、女子を紹介しあったりしたという。祭りは、男女の若者が出会う場でもあった。三島には、かつては明神の祭りくらいにしか出か

けることはなかったという。祭りの日は朝出て、夕方帰ったものだったが、大人たちは、祭りの多い季節になると若者たちが休んでばかりで働かなくなるので、苦い顔をしたものだった。

### 露天商

裾野に育った六〇歳前後の人ならば、誰でも縁日の思い出とともに懐かしく思い出されるのが、深良の遠道原から来ていた露天商のヤオキチさんの顔ではないだろうか。葛山の初午の日には、疱瘡ほうそう稲荷に並ぶ露店の中に必ずヤオキチさんの顔があった。一、二銭のおもちや、ミカン、鉄砲、イカを煮たものやおでん、ザガン

(雑菓子)、飴、キャラメル、麩菓子か、ニッキ水やニッキ棒など、品数が多くて安いので、子供たちに人気があった。

「ヤオキチ」は、勝又吉雄さん(一九〇七年生)の八百屋の屋号で、始めは、吉雄さんの母親が始めた酒屋だったが、果物や野菜を売ようになったのが、露店に出るようになるきっかけだった。吉雄さんの母親が、葛山の瘡守稲荷かさもりに露店を出して、野菜や果物とともにおもちや飴、菓子などを仕入れて一緒に商った。二〇歳になった吉雄さんが奉公から帰ってきて商売を引き継ぐまでは、母親は一人で深良、富岡、御宿の祭りを回っていた。吉雄さんは、奉公の給金を元手にリヤカーと自転車を買って本格的な露店商売を始めた。

当時、裾野市域でも同じ商売をしていた人が何人かいて、露店の場所は、代表を決めて古参から並び、同じ品物の店が並ばないようにしたものだ。祭りとともに、各地区の小学校で開かれる秋の運動会が一番の稼ぎ場だった。

商品の仕入れは、昔は三島ではなく根方の方によく行った。根方では、お茶の畑の間にニッキが植えられていたという。イカやおでんは市場の帰りに沼津で仕入れた。おもちやも一〇年ほど前までは、小一時間かけて自転車で沼津まで行って仕入れていた。その頃に行っていた大門町だいもんちょうのおもちや屋は、今は清水町しみずちょうで雛人形を扱っている。

このように、露天商が祭りのたびにムラに来ることで、子供たちは普段は手にすることのできないおもちやや、口

にすることの少ない菓子を食べたりしたものであった。

### 活動写真

子供たちの縁日に対して、青年たちの祭りの楽しみは、映画や芝居の興行だった。深良には二人ほど興行師がいて、ここに頼むと映写技師がきて映画を上映してくれたものだった。三島からは、東海芸能社という興行師もいて上映していた。人気があったのは「日露戦争と明治天皇」といったものや、嵐寛(嵐寛寿郎)、大友柳太郎のチャンバラ、ヤクザ物だった。昔は映画がかからないと大きい祭りとは言えなかったという。

一方、スソノには、一九五〇年代までは裾野演芸館という、株でやっていた映画館が一軒だけあった。青年団の間で「映画にいくべえ」と声を掛け合っては演し物が変わるたびに外かけていった。

### (五) 通 婚 圏

#### 婚姻の範囲

嫁取り、婿取りの範囲は、かつてはある程度決まっていたものだった。いってみれば、嫁取り、婿取りの範囲は世間の広がりとともに大きくなっていったと言える。

下和田では、かつては「一日で歩いて帰る範囲」、麦塚では二里から三里以内が、その範囲だったという。ムラ内の結婚も多かった。ムラ内ならば「しょう(素性)が知れているからいい」といって、下和田ばかりでなく葛山や深良でも多かった。また、ムラ内というよりはやや範囲の広い、近隣のムラや、戦前の行政村の範囲での結婚も多かった。嫁や婿に行く方向についてもある傾向があった。下和田や御宿、岩波などでは、「転ばばシモへ」という言い回しをする。上(北)は寒い、下(南)は暖かいので、農作物がよくとれて暮らしが楽だというのである。そこで嫁に(婿に)行くなら南(シモ)へと望んだのである。同様に、「今里は水がなくて大野越しなのでいやだ」と言ったり、「富沢

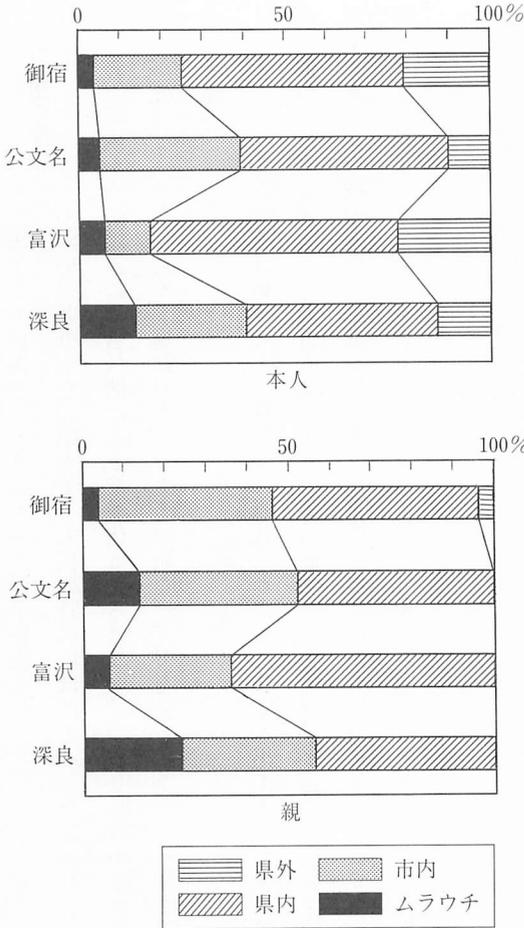
のセギと山道を見たら、嫁婿にくれるな」「公文名は祭りが多くてたいへんだ。石脇は祭りが少ないから休みが少ない」などと言って、自分の生まれ育ったところより苦勞の多い土地への婚入を避けようとしたものだった。

川をはさんだムラ同士が、結婚を避けるということもあった。岩波や深良では、黄瀬川の東と西のムラでは習慣が違うので、結婚をしなかったという。また、旧富岡村をカワムコウといって「カワムコウからヨメッコ・ムコにきても、橋が架かっていないので里帰りができない」とも言う。逆に旧富岡村の方でも、御宿では深良や公文名とは仲が悪くということがある。ムラ同士の親密さは、川を挟んでのけんかなど、子供の遊びにもあらわれる。黄瀬川については、たとえば橋がいくつか架かっていた富沢と深良の間では、嫁婿取りが盛んに行われており、川を越えて双方がどのくらいの交流をしていたかが、通婚圏にも大きく影響していた。富沢では、大野原の草を深良から買っていた縁があったというものもある。

結婚を避けようとする傾向とは反対に、特に一定の地域との婚姻が多く見られるということもある。須山には御殿場市印野・原里はらさとから嫁に来た人が多くいる。現在ではしだいに減ってきているとはいいが、それでも三〇人ほどはいる。印野方面からの嫁たちは、五〇代の主婦が中心になって「印野会」という親睦会を作って、生活の上でも深くつきあっているという。印野から須山への嫁入が多いのは、上手な世話人の存在が大きいとも言われる。話をまとめるのが上手な世話人がいるかどうか、通婚圏の形成にはかかわっていた。三島市の北上から水窪に、一九五七（昭和三二）年に嫁いできた女性は、博労が紹介してくれたという。ムラに入ってくる人々は、ものばかりでなく、嫁婿の情報ももたらしていたのである。

千福の三つのモヨリの一九〇九（明治四二）年から一九二五（大正一四）年までに生まれた女性二一人に出身地を聞いて

第6節 世間の広がり



図表2-30 通婚圏  
(1995年市史編さん室アンケート調査による)

たところ、深良が二人のほか市内は七人、県内は六人（うち御殿場は三人）、県外が三人で、ウチウマレ（ムコトリ）が二人あり夫は茶畑と沼津市から来ていた。どんな縁があったかについては、すでに親戚関係があった、あるいは同じムラに親戚がいるといった場合が圧倒的に多く、御殿場から来ている人は同じ富士岡村の同級生四人が嫁に来ているという。

## 婚姻圏の変化

図表2-30は四つのムラの通婚の様子を表したものである。話者の時代と先代の時代の最も大きなちがいは県外からの婚入で、先代の時代にはほとんどなかったと言える。

一方、県内からの婚入には世代間に大きな変化は見られない。つまり県外からの婚入が増えた分、市内とムラウチからが減っていると言える。裾野の人々の生活の範囲が、市内をとびこえて一気に県外へと広がっていったことがうかがえよう。

また、四つのムラを比較すると、深良が二世代にわたって抜きん出てムラウチの婚姻が多い。これは、第一には深良が他のムラより大きく、人口も多いことがその要因であると考えられる。さらに、「転ばばシモへ」という言葉が示すように、市域の人々の意識も無関係ではないのではないか。つまり、市域でも北部にある深良へは南からの婚入が少なく、結果としてムラウチでの婚姻が他に比べて多い傾向が続いたと考えられるのではないだろうか。